

中山間地域活性化に向けた服飾デザインと アートマネジメント 2 － 徳地手漉き和紙を用いたファッションショーと サンタクロース村での作品展開催による実践的研究 －

Clothing Design and Arts Management for the Activation of Intermediate and Mountainous Areas 2: Case Study of the Fashion Show with Tokuji Handmade Japanese Paper and the Exhibition at Santa Claus Village in Finland

研究代表 水谷由美子

共同研究者 浅田陽子・松原直子**・武永佳奈・水津初美***

Chief Researcher : Yumiko MIZUTANI*

Collaborative researchers: Yoko ASADA/Naoko MATSUBARA**/Yoshina TAKENAGA/Hatsumi SUIZU***

キーワード：中山間地域活性化 アウリンコ徳地タロ 手工芸 空間デザイン 手漉き和紙 地域資源
ロバニエミ市サンタクロース村

Keywords : Activation of Intermediate and Mountainous Areas; Clothing Design; Arts Management; Tokuji Yamaguchi City; Aurinko Tokuji Talo; Hand-crafts; Space Design; Handmade Japanese Paper; Local Resources; Santa Claus Village in Finland

This thesis is focused on the activities of the second year of ‘aurinko tokuji talo’, a project for the activation of Intermediate and Mountainous Areas in Tokuji, Yamaguchi City. As a consequence of the first year’s achievements in creating clothing design and the planning of arts managements, our research team continued developing the cooperative projects with local representatives in Tokuji.

By inviting Tokuji people to the previous year’s fashion show at Yamaguchi Prefectural University, we were requested to organize a local fashion show at Tokuji’s summer festival. It has been well-known for its dynamic fireworks; however, this year locals decided to deliver an alternative event by adding a traditional dance festival of the area. In order to celebrate it, our research team planned an outdoor fashion show utilizing the local resources of handmade Japanese paper and used Kimono materials. Here we describe the process of creation such as a hat, corsage, shawl, obi belt and knitting dress and pants made with Tokuji handmade paper as well as kimono costumes for the dance festival.

In addition to the fashion show, we analyze the Christmas Exhibition, which was carried out as an extension of the ‘aurinko Tokuji talo’ Project, at Christmas Village in Rovaniemi, Finland. We examine the entire procedures of the project.

はじめに

山口県立大学企画デザイン研究室は、2011年から山口県中山間地域元気創出若者活動支援事業と山口市中山間地域資源付加価値創造支援事業の支援を受けて、

服飾デザインとアートマネジメントを通じた山口市徳地地域のまちづくりに参加している^(注1)。このプロジェクトは地域が望む用件に関して、協働で活動することが求められているものである。

*) 山口県立大学大学院国際文化学研究所教授

*) Professor of the Intercultural studies of Graduate Schools in Yamaguchi Prefectural University

**) 山口県立大学大学院国際文化学研究所2年

**) Second Grade of the Intercultural studies of Graduate Schools in Yamaguchi Prefectural University

**) 山口県立大学大学院国際文化学研究所1年

**) First Grade of the Intercultural studies of Graduate Schools in Yamaguchi Prefectural University

本年の地域から与えられた課題は徳地の年中行事の中で、非常に重要な夏祭りにファッションショーを実施してほしいというものであった。特にファッションショーが関心を持たれたと思われる要因は、2011年12月18日に山口県立大学講堂桜園会館で開催されたクリスマスファッションショー Vol.8に徳地住民を招待したことにある。ファッションショーの1コーナーで、松原直子が徳地での活動を紹介した。その時、観客として約30名の徳地の関係者が来場した。そして舞台上では代表者に共同研究者としてインタビューを行った。

そこで地域の芸術文化の発信拠点として整備された「アウリンコ・徳地・タロ」で開催された住民参加型のワークショップや、展覧会、さらに地域資源である徳地手漉き和紙（以後、徳地和紙と記す）や古布をもちいた商品開発、および夏祭りでのストーリートやアウリンコの空間デザインについて紹介した。

今までファッションショーに触れたことがなかった徳地の人々が、クリスマスファッションショーで見た当研究室の作品やショー自体に興味をもち徳地でのファッションショーの企画を依頼してきたのだ。

徳地では長い間、地域それぞれの盆の慣習の行事としてさんさ踊りが宗教的な意味を含んで踊られてきた。特に本年は、地域それぞれのさんさ踊りを一同に会して、総合的に紹介するような祭りを「出雲ふるさとさんさ祭り」と称して夏祭りの日に創設することになった。徳地夏祭りの中心行事は「とくち花火大会」である。佐波川で打ち上げられるために、非常に近いところで花火が見られることから、中国地方でも有数の花火として情報誌に紹介されているほどである。

しかし、花火の予算を集めることは容易ではなく、とくち花火大会実行委員会や徳地観光協会の努力や工夫によって継続されているものだ。そこで、さんさ踊りの創設を祝うために、いろいろな角度で工夫し、賑わいを創出したいという地域の人々の声が上がリ、当研究室に申し出があり、「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクト vol.5 CSK13 ファッションショー「徳地COLORS～和紙と私とつながる着物Reuse～」が企画された。

運営面において、このショーは企画デザイン研究室主催であった。同時開催するために、出雲ふるさとさんさ祭り実行委員会、とくち花火大会実行委員会そして徳地観光協会の協力のもとで開催された。

本論は当実施研究を統括した筆者が全体を監修したもので、まず紙衣としてのファッションの源流につい

ての調査研究について述べる。次に、松原直子はファッションショー開催に関するマネジメントについて、武永佳奈はさんさ祭りのための衣装提案について述べる。また、浅田陽子と水津初美は徳地夏祭りのためのファッションショーに向けて制作した作品について紹介する。さらにそれらを発展させたものを山口県立大学主催で2012年12月9日に同大学講堂桜園会館で実施されたクリスマスファッションショー 2012にて発表した。それらの徳地和紙を用いた商品開発について検証する。

さらに、以上に示したファッションショーに加え、「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトの一環で、ロバニエミ市（フィンランドラップランド州）とのコラボレーション事業としてサンタクロース村にあるサンタクロースハウスのクリスマス・エキシビション・コーナーで実現した展覧会について松原直子が報告するとともに、それぞれの意義について検証するものである。

最後に全体についての考察を筆者が担当する。さらに、今回のさんさ祭りの創設に関して、さんさ踊りと現在のまちづくりの関係の先事例を調査するために現在の日本におけるさんさ踊りの中心地である盛岡さんさ踊りについて、2012年8月に現地にてフィールドワークを行ったので、その調査報告を資料として添付しているので参考にされたい。

(文責：水谷由美子)

1. 山口における手漉き和紙と紙衣の歴史

徳地における手漉き和紙の歴史について、一般には東大寺再建のために重源上人が周防の国に来て、手漉き和紙の製法を伝えたと考えられている。そこで、以下では徳地の手漉き和紙がいかにして伝来し、上質な和紙を製造するように至ったのかについて、考えてみる。

日本では6世紀の仏教伝来とともに紙漉きの技術が輸入され、独自の和紙文化が築かれてきた。信仰のために行われる写経、戸籍や地図、書籍そして障子や襖など、生活空間を作る道具などに使われてきた。

和紙の生産の広がりや普及とともに、和紙は衣服に応用され紙衣（かみころも、かみこ、かみきぬ）あるいは紙子（かみこ）とも呼ばれ、和紙による衣服文化が形成されてきた^(注2)。

鎌倉時代に仏教儀礼において用いられたのが始まりと考えられている。東大寺の修二会いわゆるお水取りの行事において、修行僧は手漉き和紙を用いて自ら紙布を作り着物に仕立てたものを修二会の儀礼において



1 東大寺修二会で使用された紙衣(白石和紙工房制作による紙布を用いたもの。工房主宰の遠藤まし子の自宅にて)

着ており、現在までこの習慣は継続されている。現在の修二会のための紙衣(写真1)は、白石和紙工房(宮城県白石市)で漉かれたもの^(注3)が使われていると工房主宰の遠藤まし子から聞いた。

筆者は見学をしに出向いた経験があるが、修二会における修行僧の儀礼は朝まで夜通し行われる。暗いお堂の中での長時間に亘る修行は極めて霊的な時間であり、修二会のクライマックスに当たるものである。修行僧が自ら作った紙衣を身に着けることは、体を清める意味をもっている。自然の樹木を素材にして作られた紙布から紙衣が作られることから、自然との一体感をもつためのメディアとしても紙衣は機能するように感じられる。

中世には武士の胴服や羽織に用いられ、おしゃれな衣服あるいは特権的な衣服として豊かなデザインが生まれている。紙布は十文字漉きつまり縦横両方に漉いた丈夫な漉手法で漉かれたものである。主に、繊維が長い楮が原料として用いられ、漉かれた和紙の表面に柿渋が塗られると丈夫になる。保温性と防水性そして軽量であることが物理的な特徴である。

江戸時代に入ると紙漉きが盛んになり、紙衣は一般の人々にも着られるようになる。そして風流を好む

人々のおしゃれ着にもなった。松尾芭蕉が「冬の紙子いまだ着かへず かげろふの我肩にたつ紙子哉」(冬のまま着込んだ紙子の肩に、ふと気が付くと陽炎がゆらいでいる、さすがに春だの意)^(注4)あるいは「紙ぎぬのぬるともをらん雨の花」(紙衣の濡れるのもいわず、雨中の花を手折るところに、雨の中を路草の風雅をめでて訪ねてきたとの挨拶をこめた)^(注5)と詠んでいる。

芭蕉の俳句から、風流なもののおしゃれ着だけでなく実際に冬の防寒着として、あるいは雨合羽としても紙衣が用いられていることがわかる。

山口の地域資源としてどのように手漉き和紙の製法が伝わり発展したか。大内氏の時代に石見で紙問屋を営んでいた国東治兵衛(くにさきじへえ)の『紙漉重宝記(かみすきちようほうき)』(1798)年によると、7世紀に柿本人麻呂が晩年石見で過ごし、紙の製法が伝えられた。石見は大内氏の領内であり、大内氏にその質の高さ故に、唐土からも輸入の要望があった。そこで、大内氏はそれを認め、石長防の3州に紙漉き製造を推奨した^(注6)。

その後江戸時代を通じて紙漉きが盛んとなり継承されてきたものである。平安末期から鎌倉時代初期に、東大寺再建のための建材を求めて重源上人が周防(現在の徳地や防府地域が主な活動範囲)に来て活躍した。それ故に、徳地地域では重源上人との関係で和紙文化が伝来されてきたと考えられている。いずれにしても、地域において紙衣の歴史に関する資料は見つかっていない。

現在の山口県では徳地、岩国、山代にて紙漉きの伝統が継承されている。それは、大内氏の時代から毛利氏の時代に移り、毛利氏の経済戦略の一つである「防長三白」(米・塩・紙)の政策の一環で紙漉きが推奨され、江戸時代を通じて徳地では紙漉きが盛んに行われてきた。

第2次世界大戦後しばらくまで、徳地島地の藤木地区などではほとんどの家で紙漉きが行われていた。かつては、農家の農閑期である冬の仕事であった。現在では千々松哲也と山内幸夫の2軒のみが産業として紙漉きを行っている。その他に、重源の郷(山口市徳地)の白波という手漉き和紙工房で、一般の人への普及を目的とした紙漉き体験が行われている。同時に、そこで若手の紙漉きの後継者が育ってきていることが現状である。

今後、地域の伝統工芸でありかつては産業としても栄えていた紙漉きが、現代生活における新しい用途が

開発されることが、継承に求められることではないかと考える。その活動の一環として紙衣ファッションを商品開発に向けて行くための実験を繰り返し実施している。

以下でとくち夏祭りにおけるファッションショーのための商品開発について主に述べる。2012年11月には山口県立大学の学術交流提携校であるフィンランド国立ラップランド大学においてワークショップを実施し、そこで4か国の学生が紙布を作り、ファッションデザインに挑んだ。この事例については、「山口県立大学とラップランド大学におけるデザイン教育プログラムの共同開発に関する研究 - 世界の地域資源を融合させる服飾デザインのワークショップの事例について -」^(注7)を参照してほしい。(文責：水谷由美子)

2. ファッションショーの概要とその周辺

今回は学部生のパートでは徳地の住民とのコミュニケーションを通じた作品を制作したいという考えから、昨年設置された「アウリンコ・徳地・タロ」に関わっている人々に浴衣や着物の提供をお願いした。

徳地の自然や石風呂などをフィールドワークして、それぞれの個性が色で反映されるような考え方で本テーマを徳地COLORSとし、和紙と主に徳地の人々の着物をリユースすることから副題に「和紙と私とつながる着物Reuse」とした。

場所は佐波川の近くに位置しており、大きい広場をもっている山口市徳地総合支所の駐車場に決められた。このスペースでさんさ祭りとファッションショーが行われることになった。盆踊りのよう輪踊りの形式がとられるさんさ踊りには櫓が組まれるために、舞台設営をどこにするかが問題であった。結論は総合庁舎側にある緑のカーテンを背景として舞台が組まれた。学部生の農作業から着想を得た作品など徳地の自然を着想にした作品が多くデザインされたために、グリーンカーテンの背景は非常に効果的であった。

次に作品についての概要を述べたい。

昨年の徳地地域との共同研究の中で、特に徳地和紙を用いた創作活動が推奨されたこともあり、大学院生の浅田陽子、水津初美そして武永佳奈はそれぞれの素材テーマとして徳地和紙を使って制作をした。浅田と水津は「千々松和紙製作所」の和紙、武永は重源の郷にある和紙工房「白波」の和紙をそれぞれ用いた。前述したように千々松和紙製作所の千々松哲也は、山内幸夫とともに手漉き和紙の伝統継承者である。また、重源の郷では地域の伝統工芸の普及を促すために、手

漉きのワークショップができる和紙工房「白波」が設置されており、商品も販売されている。

本論では中山間地域活性化の活動として、主に徳地に固有の手漉き和紙をテーマにしているの、着物をリユースして制作した学部生の作品については詳細に触れないことをおことわりしておく。

徳地を対象に中山間地域活性化に向けた地域との共同研究は2年目に入っている。そこで、昨年からの継承事項について少し触れておきたい。昨年の夏祭りでは大学院1年生であった藤田幸司が企画・デザインし、地元住民とともに実施したワークショップで作成したイルミネーション（写真2-1右と2-2）が、今年も旧商店街に展示され、人々の流れが旧商店街にできた。かつて夏祭りではほとんど顧みられなかった空間であるが、このイルミネーションによる空間演出によって地域の人々や観光客が旧商店街を散策するようになり、イルミネーションのある空間は記念撮影の恰好の場所になっていた。



2-1 徳地和紙のイルミネーションによる旧商店街の空間デザイン
2012年9月1日



2-2 徳地和紙のイルミネーションによる旧商店街の空間デザイン
2012年9月1日



3 地域関係者との協議の様子(山口市徳地市総合支所2階)
2012年6月14日

昨年の研究室制作の三桎を用いたイルミネーションに加えて、今年は徳地の串地域で活動している「ゆめ工房」が制作した徳地和紙が使われた竹灯籠も加わった(写真2-1左)。地域の創作活動のきっかけや住人のモチベーションを与える役割を大学が行い、それに沿って地域の住民主体の活動に展開されたことは、中山間地域活性化の活動が一定の成果を得たと考えることができる。

さらに、このイルミネーションは山口市瑠璃光寺で開催された「山口ゆらめき回廊」において、露山堂周辺で2012年9月15日に催された茶道裏千家淡交会山口支部山口青年会主催の「ゆらめき灯り茶会」に貸し出された。徳地の人々によって創作された作品が、大切にされ発展的な活動の道具として機能し、新しい地域の文化を創造している。(文責：水谷由美子)

3. 「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトvol.5 CSK13 ファッションショー「徳地COLORS ～ 和紙と私とつながる着物Reuse～」の企画・運営 (1) 地域の祭りとはファッションショー

企画デザイン研究室の学生は、2012年6月14日に、山口市徳地総合庁舎で行われた会議に出席した。そこで、山口市社会福祉協議会徳地支部長の藤周次から、徳地の歴史的背景と地域に伝わる祭りについて学んだ(写真3)。毎年徳地では、8月の最後の土曜日に花火大会を開催することが恒例となっている。今年は以前より地域のお盆の行事として踊られてきたさんさ踊りを、宗教的な意味合いをなくし、地域の現代的な祝祭として新しく創設した「出雲ふるさとさんさ祭り」を同日に開催した。

アートによるまちづくりの視点に立ち、新しく生まれた地域の祭りを祝い、話題性を持たせるため、ファッションショーは祭りの踊りが始まる前に開催されることになった。

祭りの櫓、提灯の飾り、そして各団体の出展ブース

が立ち並ぶ山口市徳地総合支所庁舎前に特設ステージが作られた。建物を挟んで川岸では、花火大会が行われることになった。

「出雲ふるさとさんさ祭り」と「とくち花火大会」は、異なる団体や企業が支援をしているため、それぞれ実行委員会が立ち上げられ運営されていた。企画デザイン研究室では、特に、「出雲ふるさとさんさ祭り」実行委員会と連携し、協議を重ねていく必要性があった。

(2) ファッションショーのコンセプト

山口市徳地には、森林セラピー基地のある豊かな森と、大原湖や佐波川といった自然資源がある。また歴史文化資源である石風呂が、徳地各地に点在している。鎌倉時代に重源上人が、東大寺再建のために用材を切り出した職人のために造らせた伝説が今も残っている。

上記のような徳地の特色や魅力を認識するため、学生は5月31日と6月14日にフィールド調査を行い、ファッションショーのコンセプトを明確にしていた。調査で得たフィードバックをもとに、サステイナブルやエコロジーの観点から、地域の方が着用しなくなった着物や浴衣と、地域資源である徳地手漉き和紙を、服飾デザインや生活造形の素材として選択した。そして、住民がファッションショーという、中山間地域とはかけ離れた、若々しく華やかなものを媒体として地域資源の作品を見ることで、未知の可能性を発見することが期待された。

このようなことから、アートマネジメントの手法を用い、地域の特性である芸術文化をこれからも受け継いでいき、同時に新たな息吹を送り込むという思いをコンセプトにした。こういった概念は、同郷意識のない人間の集団である都市には存在しないのではないだろうか。同郷意識を持つ人々の集落である中山間地域である故、このプロジェクトが多くの人々の心に届くと考えた。

(3) 地域とのパートナーシップ

ファッションショーの準備の段階で、地域、行政、大学が共同で作り上げていく時、アートマネジメントによる運営の要素として考えられる様々な事象が起きた。

この事業は、山口県と山口市の助成を受けて成り立っていたが、今まで徳地では前例のない野外のイベントであったため、ショーを構成する設備、ステージや控え室また、雨天時の場所の確保、ショーの運営に係わる人材集め等に関して、地域、行政、大学のあらゆる関係先に依頼しなければならなかった。

主催である山口県立大学企画デザイン研究室に所属する筆者は、ショー全体のコーディネーターとして、7月3日に現地を視察した。徳地観光協会の前田繁志、坂本工建の坂本新二、株式会社やの舞台美術の山内浩之らと一緒に、ステージのレイアウトや当日の流れを確認した。また筆者は、社会福祉協議会や地域交流センターなどの関係する機関に挨拶回りを行った。地方である中山間地域では、一度よくない噂が立つと、それを払拭することは、不可能に近い。逆に、真摯な態度は人から好まれ、良好な関係を長続きさせるからだ。アートマネジメントを実践する上で、表面には見えないところで、数々の行動を起こす必要があることを筆者は痛感した。

ショーが近づくとつれ、徳地での準備作業が増えた。まず、ショーのチラシを徳地全2600戸世帯に配布した。市の回覧板を利用する作業に、筆者を含む学生3人と地域のボランティア4人が携わった。次に、小学生や高校生といった地域住民が、モデルとしてショーに参加するための打ち合わせを、デザイナーの学生が中心となってアウリンコで行った。そしてショーの2日前には、祭りの司会について、「出雲ふるさとさんさ祭り」と「とくぢ花火大会」の両実行委員会のMC担当者と筆者が、最終打ち合わせを行った。

(4) ファッションショーの実施

2012年9月1日、山口市徳地総合支所に設けた特設ステージを舞台に、CSK13ファッションショー「徳地 COLORS ～和紙と私とつながる着物 Reuse～」を開催した。ショーは18時15分から19時まで行われ、入場は無料とした（写真4）。



4 「CSK13 ファッションショー徳地 COLORS ～和紙と私とつながる着物 Reuse～」のチラシ
デザイン 石川智香子・岡田祥実

当日、学生は午前10時に現地入りし、山口市社会福祉協議会徳地支部の1階交流スペース部分を、モデルと関係者の控え室として利用する準備を行った。準備

作業は、とくぢ指定居宅介護支援事業所ケアマネージャーの河野朋恵の指導のもと、速やかに行われた。祭りの最中に、間違って関係者以外を控え室に入れないよう、機材搬入時以外は、正面玄関の自動ドアを閉めた。建物の脇の通用門を出入り口にするこで、混乱を回避した。

特設ステージは、緑のカーテンを背景に3.6×10mの長方形、高さ0.75mで設置された。当初、キャットウォークには、30cm×30cmの正方形のグレーの絨毯をひく予定であったが、舞台が暗くなり、枚数も足りなかったため、学生全員で協議し、マスタード色のコンパネの表の色を逆に利用する案を選択することで、舞台を完成させた。

午後2時には、大学からのバスに乗り学生モデルが到着し、地元のモデルと合同で午後2時30分より、全体リハーサルを行った。リハーサル終了後、東亜大学デザイン学部トータルビューティ学科副学科長の皆川慎啓の指導のもと、学生7人がモデルのヘアメイクを担当した。9月とはいえ、まだまだ暑い日が続いており、野外のファッションショーを考慮して、メイクが汗で流れないよう注意した。

山口市徳地総合庁舎前には、夕方頃には、仮設テントが並び、各団体による出展が進められていた。筆者も、山口県立大学企画デザイン研究室による、「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトの広報を行う宣伝ブースを出展した。そこでは、今回のファッションショーのチラシや、パンフレットを配布し、さらには、徳地和紙の提灯をブースに設置し、ユニークな学生による取り組みをアピールした（写真5）。



5 出雲ふるさとさんさ祭りの会場での「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトの広報活動ブースの出展
2012年9月1日

出雲ふるさとさんさ祭り実行委員会の主催による、地元住民による芸能ステージショーの後、山口県立大学企画デザイン研究室主催のファッションショーが続いた。まずプロローグに「森のコンサート」と題するアコース

ティックギター演奏があった。ファッションショーが始まる頃には、特設ステージ前の席は満席となった。心地よいプロローグを聞きながら、配布したパンフレットを念入りに読んでいた観客の姿が目立った。

特に印象的なことは、ファッションショーへの関心の高さである。すでにショーが始まる1時間前から多くの地域住民が席取りをしていたのだ。

ファッションショーは、第1部と第2部で構成された。まず第1部では、「アートマネジメントによる地域活性化」のプレゼンテーション、次に、徳地和紙等の地域資源を活かした作品10点が披露された。そして、第2部では、徳地の有志から提供された着物を一部再利用し、新しく創造した作品11点がステージを飾った。

すでに日が落ち、祭りの提灯の明かりが揺らめく中、フィナーレになり、デザイナーである学生、学生モデル、地域のモデル、そして関係者が舞台の上で挨拶をし、ファッションショーの余韻が冷めぬ間に、会場はさんさ祭りへと移行していった。デザイナーやモデルは、衣装を身にまとったまま、踊りの輪に参加しさんさ祭り創設を祝福した。若者たちの存在が、高齢化した地域の踊りに新鮮な風を吹き込むことができた。

(5) 結果と今後の課題

今回のファッションショーは、中山間地域を服飾デザインとアートマネジメントを用いて活性化することが、狙いであった。初年度からの活動を継続し、地域の夏祭りでのファッションショーという、話題性に富んだ試みを行えたことは、これを支える行政、支援団体、大学、そして地域の自発的な住民のサポートがあったからである。ファッションショーの開催には、多大な経費がかかるが、やの舞台美術や坂本工建といった協力団体の支援により、本格的な舞台、音響、そして照明を兼ね備えた盛大なショーになった。

モデルとして参加した、徳地在住のAは、「他の市から徳地に移り住んだが、ファッションショーに参加

し、ステージに立ったとき、顔見知りの方からの応援の声が聞こえて、感動した。これを機会に、もっと徳地の生活に溶け込んで行きたい」とインタビューに答えた。また、ショーを見学したBからは、「徳地のことをよく理解してくれたファッションショーをして下さって、ありがとう」というコメントもあった。

地域に出向いていき、そこにある問題をファッションショーという形で、解決しようとする試みにより、そこに暮らす地域住民が社会へアクセスでき、地域の特性や価値を再認識することが出来た。

しかし、この活動を支えている山口県と山口市の助成金は来年度までの予定であることを考慮すると、地域で自発的に運営資金を生み、それを活動資金に変えていくシステム作りが不可欠だ。(文責:松原直子)

4. 袴パンツプロジェクトにおけるさんさ踊りの衣装提案

筆者は昨年から当研究プロジェクトにおいて、徳地地域の農業を中心とする昔ながらの生活の価値や魅力を伝える事を目的に、地域で親しまれるモンペやそのルーツである袴を着想源としたパンツのデザインと製作を進める袴パンツプロジェクトを立ち上げ、現在も継続して活動している(資料1・2)。

袴パンツの商品化に向け、徳地さんさ工房が2012年4月にプロジェクトの拠点、「アウリンコ・徳地・タロ」に立ち上げられた。地域の新しい経済活動の場として機能し始めているさんさ工房を、筆者は自らデザインした商品の縫製を依頼することで支援している。

地域との繋がりを深め、工房の活動に持続性を持たせるために祭りの衣装や旅館の制服など定期的に生産する商品の製作も行いたいと考えていたところ、主に出雲地区のさんさ踊りを運営する、徳地堀四区まちづくりの会と出雲地域づくり協議会から袴パンツをベースとした、出雲地区さんさ踊りの衣装デザインの依頼



資料1 朝日新聞 2012年1月10日



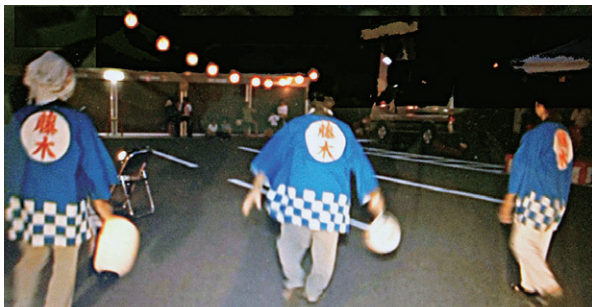
資料2 読売新聞夕刊 2012年4月19日



6 山口県立大学大学院オープンキャンパス 山口県立大学看護棟2階ホール 2012年10月14日



7 関・才谷地区さんさ踊り衣装DVD
「山口市の民俗芸能 徳地サンサ踊」



8 島地・藤木地区さんさ踊り衣装 DVD「山口市の民俗芸能 徳地サンサ踊」

があり、袴パンツプロジェクトの二年目の計画として取り組む事となった（写真6）。

さんさ踊りの現状を調査したところ、平成22年に「ふるさと徳地サンサ踊・保存継承事業実行委員会」によりさんさ総踊りが創設されたことで、さんさ踊りに観光やまちづくりの強化による地域活性化を目的とした娯楽性が出てきた事が分かった。

これまでの地域内のみで行われていたさんさ踊りでは先祖の供養を行う儀礼としての宗教的な意味があった。総踊りではその意味の欠落があり問題点も指摘されている。また地区ごとの踊り方や唄、太鼓回しの違いは、地域間の軋轢ともなっている。

一方で各地区の名前を入れた衣装を纏い、踊りを披露しあうなど、競争的な雰囲気によるさんさ踊りの活性化も期待されている。

現在、衣装を所持しているのは、さんさ踊りが踊られている伊賀地、堀、関・才谷、小古祖、八坂、島地・藤木、串、遠地地区の中で、関・才谷地区と島地・藤木地区のみで、どちらも腰丈の法被に地区名を入れたものである（写真7・8）。他の地区では市販の浴衣を揃え着用する人も見られる。

法被は上半身のみで前開きのため、各々が自由に着ている内着が露出し、統一感は少ない。市販の浴衣は、統一感はあるが、異なった地区で同じものを着ていることがあり、地区の独自性に欠けている。また、衣装を着用する人とならない人がいることも見た目を悪くしている。

現在ある衣装は地区ごとのさんさ踊りに重きが置かれ、見せることが重視されていない。しかし、観光やまちづくりを重視するさんさ総踊りの衣装にはそれらを視野に入れてアピール性を持つことが求められた。

今回の衣装デザインでは、衣装を競う要素を取り入れること、団体の統一感を高めることに合わせ、徳地独自のアピール性を含むこと、またそれが、娯楽面の強い総踊り、宗教的な意味合いの強い地区ごとのさんさ踊りのどちらでも着られることが課題となった。

そこで、観光やまちづくりとしての盛り上がりを示している、盛岡さんさ踊りや高知よさこい祭りを参考にすることにした。これらの祭りの行列では衣装を競う要素があり、衣装代に3～10万円程度予算が使われ、衣装がチームごとに揃えられている。頭から足先までトータルコーディネートされた衣装は団体に強い統一感と華やかさを生み見ごたえがある。観光的な意味合いで祭りをアピールするためには、こうした衣装の工夫が参考になる。

他地域の祭り衣装の調査を経て、筆者は盛岡さんさ踊りに見られる花笠など頭部に個性的なものがあると効果的だと考えたので、被りものも含めて全身をコーディネートした衣装デザインをすることに決めた。

さんさ踊りが伝わったとされる江戸時代の野良着をベースに、活動しやすい作務衣の造りを取り入れ袖の長さや衿の厚さを調節しデザインした。

また、住民の励みともなる明るい印象のさんさ総踊りを演出するために、夏の暑い日に重源上人がそまりの人々を扇ぎ、涼しい風を送って皆を励ましたと言いつづける「日戻しの扇子」^(注8)を身頃の背面、手甲、団扇のモチーフにすることにした。

宗教的な意味合いは色で表現した。先祖の魂を迎え入れる白、死者を守る藍を主な色彩とし^(注9)、華やかさを加えるため誘目性の高い赤を加えた^(注10)。



9 江戸文字の配置
名所江戸百景 駿河町(歌川広重)

独自性を強めるため素材にもコンセプトを設けた。それは地域の中で放出された素材を再利用することである。そこで、地域の旅館で使用されていた浴衣地を集め自ら染色を施し衣装の中心となる上着に使用した。

生地厚の少ない浴衣地に立体感を加えるため、ワッフル地を合わせた。ワッフル地は農作業時に首に掛け使用するタオルにも質感が似ており、衣装の雰囲気に適していると考えたからである。

また、細部にもこだわりをもち制作した。胸にパッチワークした出雲の書体には、江戸時代の書体を元に作られている江戸勘亭流を使用し、当時の暖簾デザインなどで流行した、力強い配置を採用した(写真9)。

下半身は袴パンツの造りを簡略化したものを採用した。素材には綿を利用し、従来のさんさ踊りで各々が纏った浴衣が踊り中にゆれる雰囲気を壊さないように配慮した。そこに伸縮性のあるスパッツとサイズ調節のできる脚絆を合わせた。

様々な体型サイズに適應できることを意識し、内着が露出しないよう腰巻と地域で取れた藁を編んで制作した縄飾りを巻いた。

その他の面として、祭りの継続が伝統産業の継承に繋がるよう、衣装の中で団扇、手甲そして笠内に徳地和紙を用いることにした。これらの小物は研究後の取り組みの一環として、地域住民自らが製作することを計画に入れている。

制作は和紙工房「白波」に勤務する栗屋かすみと話し合いを行いながら、単純な工程で製作できることを前提に進めた。



10 CSK13ファッションショー徳地COLORS
2012年9月1日 徳地総合支所特設ステージ

団扇は工房内で行われる手漉き和紙の団扇づくり体験の工程に江戸勘亭流の徳の字を印刷した紙を挿む工程を加え製作した。手甲は和布を作る際に和紙を漉る工程を参考に捻りを加え扇の形に形成し製作した。笠は工房のレジに置かれた小物入れに使用されていた、竹に和紙を張る方法を参考に製作した。

今年の9月1日に出雲ふるさとさんさ祭り内のファッションショーで作品を発表した(写真10)。モデルは昨年の徳地和紙イルミネーションのワークショップで知り合った金子友木子に依頼した。金子は出雲地区のさんさ踊りの練習に毎年参加しており、さんさ踊りの表現に長けていると考えたからである。

実用化に向け、さんさ工房での製作に2万円程度の予算を考えていた。既存の浴衣地を主に使用していた為、価格を抑えられたと感じていたが、それでは高すぎて実行が困難であった。

笠や下駄の仕入れルートの確立や筆者の製作したプロトタイプのパッチワーク部分をプリントに換えるなど、更なるコスト削減に向けた改良が今後の課題である。

一方、ファッションショー内で金子が行ったさんさ踊りの振りを加えたパフォーマンスは衣装を引き立て、高評価を得た。そこで、発表した衣装を「アウリンコ・徳地・タロ」で展示することとなった。

展示中の衣装に今年からアウリンコを常設場とし活動している徳地人形浄瑠璃の保存会が興味を示し、筆者に人形浄瑠璃上演時のユニフォームを提案して欲しいという依頼があった。

このようにさんさ踊りの衣装提案は、袴パンツプロジェクトに新しい方向性を生み出しつつある。今後、



11 和紙製サマーハット紙布リボン付2012-1



12 和紙製サマーハット紙布リボン付2012-2



11 和紙製日よけ帽子紙布リボン付2012-1

徳地地域および山口県内を拠点とする団体の衣装制作にも活動範囲を広げながら、3年目の活動に取り組みたい。(文責 武永佳奈)

5. 徳地手漉き和紙を用いた服飾デザイン 「紙布」シリーズ

(1) 紙布を使った商品開発の背景

まず、筆者が徳地和紙に出会うまでの経緯を述べてい。筆者は修行時代に織物の産地米沢の機屋に滞在し、



14 CSK13ファッションショー徳地COLORS
2012年9月1日 徳地総合支所特設ステージ



15 和紙コサージュ
2012年9月1日

絹紙布の帯を織っていた。紙布とは楮で漉いた和紙を細かく裁断し湿らせ、平らな石の上で揉んで丸め、継いで一本の糸にして、それを織り上げた布のことで経糸に絹糸、緯糸に紙糸を使用して織った布を絹紙布という。

紙布の素材には楮を100%原料にして漉いた福島県の上川崎和紙を使用した。純楮和紙はかなり強く揉んでも破れることはない。その理由は、楮の靱皮繊維が長く太いために強靱で柔軟であるからである。

紙布帯は機械で織ることは難しいため一本一本手織りしなければならない。米沢では、ほとんどの機屋が機械化しており、織り上がるまでの行程は手作業しなければならないために、手間がかかり大量生産できない紙布帯を織っている機屋は当時でも少なかった。

山口県に戻り、萩市の地域資源である楮を染料にし



16 17 Xmas ファッションショー Vol.9 紙糸コサージュ 2012-1 紙糸ショール 2012-1

て、経糸となる絹糸を染めた。そして、緯糸に徳地和紙の紙糸を使い、紙布帯のサンプルを織ってみることにした。そこで、米沢時代に使用していた福島の上川崎和紙と同様な品質の和紙を求めるために、1997年の11月に初めて徳地の千々松和紙工房と山内幸夫のアトリエを訪ねた。当時、徳地で和紙を漉いているのはこの二軒しかなかった。しかし、大きさや色、厚み、そしてさわった感触が同じような和紙には出会えなかった。

原料が採れた地域や季節が違い、また、伝承されてきた紙漉きの技術が違うことから同じ和紙はできないことが分かった。それ故、似たようなものを求めるのではなく、徳地独自の紙布を創作するために、徳地で昔から漉かれている和紙をまず知ることからはじめた。

そこで千々松哲也に紙布のことを話し、上川崎和紙を示して、それと似たようなものに漉いてもらう依頼をしたところ承諾が得られた。そして、新たに漉いてもらったところ、上川崎和紙よりも少し硬かった。その理由は、楮の分量の配合が原因と思われた。

その後、千々松和紙工房へ何度か足を運び、話し合いを重ねるうちに、信頼関係も生まれ筆者がイメージする素材を入手することができた。

そして、2012年、山口県立大学大学院に入学後、偶然に筆者が所属する企画デザイン研究室が中山間地域活性化プロジェクトで徳地をフィールドとしていることを知った。プロジェクトでは、徳地の伝統工芸であ

る手漉き和紙を主な素材として扱おうと聞き、この偶然の出会いを喜んだ。その後、従来から計画していたカメラ、つまり椿の柄があり、緯糸に徳地和紙を用いた着物の帯地を制作することにした。同時に、徳地の夏祭りのファッションショーのために、帽子とコサージュを制作することにした。

(2) 紙布を用いた商品開発 - 帽子とコサージュ

徳地和紙は古代から継承されてきたものであるが、現在では生産が減少している。地域資源を生かした商品開発を通じて地域活性化するためには、

継承者を増やす前に、まずは、手漉き和紙の用途を広げ、需要を生み出していくことが課題であると考えた。そこで、多くの人々が楽しめるような商品の開発として帽子を選択し、そのプロトタイプを創作した。

まずは手漉き和紙の魅力を伝えるために、色は手漉きされたままの生成りの色を選んだ。千々松が漉いた身近な障子紙を材料に選び、それらを短冊に切り、帽子の型を土台にして上から貼り合わせる手法で帽子を制作した。糊の具合などに調整が必要であり、何度か実験を重ねて3種類の帽子を完成させた。

ハットの形の帽子なので、翼の付け根にリボンをつけるシンプルなデザインにした。このリボンは紙糸で織って表情を出した (写真11・12・13)。

夏祭りのファッションショーでモデルに被せて発表



18 紙糸作り- 和紙に切り込みを入れる



19 紙糸作り- 18を揉む



20 紙糸作り - 1本の紙糸による



21 色糸合わせ



22 紙布織り



23 紙布帯前柄



24 紙布帯お太鼓柄



25 紙布装着用例 Xmasファッションショー-Vol.9
2012年12月9日

した(写真14)。帽子は軽いため、風が吹くと脱げやすかったので、サイズや頭回りの内側で工夫することが今後の課題である。

コサージュは、帯を織るために短冊切りした紙糸を束ねてアレンジして制作した。研究室でアーツ・マネジメントを研究している松原直子が紙糸のたばを見てコサージュにしたらいいのではないかとアドバイスしたところから発想された。彼女は、米国でウエディングドレスのクチュール制作に携わっており、その時の経験をヒントに発想したようだ。

はじめての発表として松原直子が夏祭りのファッションショーでプレゼンテーションの時に身につけたが、非常に好評であり、次のショールへの発想が生まれた。付け加えると、このコサージュのコーディネイトにおいて、洋服や洋服を着るシーンに合わせて、付け方が工夫出来る新しいフレキシブルな要素を兼ね備えた“かたち”のコサージュである(写真15)。

最後に和紙は通気性や吸湿性、収縮性などに優れ、丈夫で空気清浄能力があり、紫外線もカットし優しい光だけを通すなどの特長を持っていると言われていた。その特長を最大に生かせるものを創作しようと考えた。それ故に、アイテムに通気性、紫外線カットを重視する帽子とコサージュを選んだ。

(3) 紙布を用いた商品開発 - ショールと帯

すでに他でも触れられているが、12月9日に行われたクリスマスファッションショーのために、ショールと帯を発表することにした。テーマは「カメリア Camellia」つまり椿の花である。筆者は萩の椿の幹を原料として、天然素材の布による装飾品を染めて、萩博物館などのミュージアムグッズを制作している。

それ故に、椿に対するリサーチをしており、また椿の花の美しさに魅了されているので、今回は椿の花に注目して、染織で表現することにした。まず、ショールは前節で述べたように、コサージュが高評を得たため取り組むことにした。特に紙糸で多重に絡めて蕨を表現し、カメリアは和紙を赤く染め立体的に表現した。これは東大寺の修二会で飾られる糸製の椿の花をイメージしている。

特に何重かになった紙糸の流れは、着用者をエレガントに見せるように「デザインした」。また、さらにアール・デコの作家、ミュシャの版画に描かれているようなイメージの曲線的に流れる蕨のような表現をめざした。実際に肩から前に流れ、ウエストの場所で交差したショールの表現は、立体的に作ったカメリアの花のアクセントと紙糸の絡み具合が適切で、イメージ通り

のものができた(写真16・17)。

次に目標であった紙布帯について説明したい。テーマは同じカメラである。経糸は椿の幹を煮出して作った染料で染めた絹糸(薄茶色)、緯糸は徳地和紙で作った紙糸を使用して絹紙布にし(写真18・19・20・21・22)、形態は九寸名古屋帯を制作した。お太鼓柄と前柄は椿の花をモチーフにしてコチニールで赤く染めた糸をすくい織りにした(写真23・24)。幅広い年齢層に締めてもらえるように椿の花の形や色のイメージをアレンジしてデザインした。

クリスマスファッションショー2012では自分で織ってデザインして染めた着物と組み合わせてエスニックな感じにコーディネートし、表現した。

紙布帯は着物に結ばず、インドネシアのスレンダンのように肩にかけるか迷ったが、水谷教授のアドバイスにより、肩から脇へ斜めに掛けることにした。

実際にモデルに着せてみるとデザイン画やボディに着せるのとは印象が異なった。本当の洋服ではないので、ボディに着せるより丸みや丈の長さがわかり着せやすかった。紙布帯はモデルの体型や付け心地、帯の見せ方など考慮してインドネシアのスレンダンのように着けて、前で止めることに変更した。紙布帯がアピールできるコーディネートになった(写真25)。

今後の課題として、特に紙布帯については、風合いに影響するので、揉みかすが少なくなるような和紙を漉いてもらうように千々松に依頼し、帯に相応しい材料などの調整を共同でできないかと考えている。

また、帽子やコサージュ、さらにショールなどは、生産方法やコストに考慮して、実際に商品にして売り出せるようなシステム作りも検討して行きたい。

さらに、徳地和紙の特徴や素材などについて綿密に調査し、衣服になるような紙布の研究をして、新しい徳地の伝統が生まれるように地域固有の商品開発の研究をして行く。(文責:水津初美)

6. 徳地手漉き和紙を用いた服飾デザイン「帰森」 デザインシリーズ

デザイン・制作: 浅田陽子

(1) 「帰森(きしん)」— 徳地和紙を用いたニットによる服飾造形 —

「帰森(きしん)」(以後「帰森」と記述する)とは、人々が温もりを求めて帰郷するように森に帰ってゆくという意味の造語である。筆者は2011年よりこのタイトルで、徳地和紙を用いたニットによる服飾造形を制作してきた。

先ず「森」に着目した理由は、徳地の素晴らしい自然に触れ、その豊かな森の持つパワーに圧倒されたからである。四季折々に違った表情で向かえ入れてくれ、そして全てを包み込んでくれる森に身を委ねると、心は落ち着き癒されてゆく。

実際、徳地の大原湖周辺の森は、NPO法人「森林セラピーソサエティ」(東京)によって「森林セラピー基地」として認定されている。科学的には樹木の放出する化学物質のフィトンチッドが要因となり、森林浴によって免疫力が高まり血圧の低下や脳の沈静化といった効果が確かめられている^(注11)(写真26)。



26 山口市徳地の森

また思想的な面からも、森(樹木)の存在は人々にとって重要な位置を占めている。例えば鎮守の森が挙げられる。ここで言う森とは極めて清浄な場所であり聖域である。この樹木に宿る神々を敬い尊んできた祖先たちの思いは、古来より我々日本人の心の中に脈々と受け継がれている。樹齢数千年の大樹にしめ縄を巻いたり、またそれに真向かうと敬虔な心持になるのはその証しと思われる。そもそも農耕民族であった我々の先祖たちは、森(日本では里山)と共に暮らし、感じ、学んできた。森はまさに我々の原風景であり、自分が帰れる場所なのだ^(注12)。

ここで人々と森との関わりを客観的に探る為に、我々とルーツを共にする人々、言い換えれば森と共に生きてきた民族であるフィンランドの人々を対象にしたアンケート調査の結果を紹介しよう。2012年11月、ラップランド大学の学生たちに森に関する聞き取り調査をおこなった。その中で「最近森に行きましたか?」の問いでは31名中26名がYESと答えている。また、「自分のお気に入りの森はありますか?」の問いに31名中20名が具体的な森を挙げ、NOの答えの中でも「まだ決めていない」「全ての森が好きだ」という回答が6



27 フィンランド
ロバニエミ市の森



28 徳地手漉き和紙(千々松哲也作)

名であり、人々と森との関わりが密であることがわかった(写真27)。この結果と比較する為に山口県立大学の学生30名に同じ質問をした結果、最初の質問に関してYESと答えたのはわずか4名であった。

これらを踏まえたうえで今一度、多くの人々に豊かな森の存在を認識してもらい、森に寄り添って感性豊かに暮らしていくライフスタイルを提案することが、「帰森」のテーマである。

ここで筆者が特にこだわったのが、制作に用いる素材である。絹や毛などのたんぱく質素材ではなく、またアクリルやレーヨンといった化学繊維でもない。「帰森」の一連の作品で使用する素材は山口県の豊かな自然に生まれ、いにしえよりその技術が受け継がれてきた徳地和紙が最適であると考えた(写真28)。この徳地和紙は、筆者が大学院入学前から関わっている素材である。

筆者は1994年より編物の普及と編み表現による無限の可能性を追求する為に、全国各地で活動母体をアトリエ イマジネーションと称して、アートニット展を開催してきた。このときに作品をファッションデザインではなくひとつのアート作品として展示する為のディスプレイの一部分に和紙を用いていた(写真

29)。これは徳地和紙の有機的な質感と自身のニット作品との相性が良かったこともあるが、県外で活動する際に何かふるさとのものを持っていたい、という思いがあったからだ。

今回は「帰森」という筆者の長年のテーマを掲げ、郷土愛的な要素も加味させ、和紙とニットを融合させるというまだ誰も手掛けていなかった分野に新たに踏み込み、発表していくことで、自らの創作活動の結実期にしたいと考えた。またこの活動は、徳地の手漉き



29 Gallery マロニエにて

文化を多くの人々に紹介し、徳地和紙の新たな可能性を提示できる好機と思われた。

このような視点から「森」を意識した「帰森シリーズ」は生まれ、徳地和紙を中心素材に、綿・麻などの植物素材で構成した作品群は、「大地のめぐみを纏う」をコンセプトに、自然回帰やナチュラルな生き方を提案しつつ展開していった。

まずはじめに、2011年の12月18日、山口県立大学講堂桜園会館にて開催されたクリスマスファッションショー Vol.8で、この徳地和紙を用いたニット作品2点(メンズのプルオーバーとレディースのワンピース)を発表した(写真30・31)。(以後メンズの作品を「帰森Ⅰ」レディースの作品を「帰森Ⅱ」とする。)これらの作品は、雪に覆われた冬の森をイメージしている。

この作品で筆者は、皺加工を施した和紙と編地(鹿の子編み)の組み合わせに新たな美を見出した。異素材の組み合わせにより互いの質感を引き立てあい、ニットだけでは出せなかった表現が生まれ、ニットと和紙との表現の可能性を感じた。

この方法をさらに展開させて手掛けたのが「帰森Ⅲ」である(写真32)。まずこの制作にあたり、象徴となるイメージソースを求めて様々な森に足を運んだ。そして徳地なめら地区にある巨樹に出会った。そこから強くインスパイヤーされ、さらに様々な樹木のイメー



30 「帰森Ⅰ」XmasファッションショーVol.8
2011年12月18日



31 「帰森Ⅱ」XmasファッションショーVol.8
2011年12月18日



32 「帰森Ⅲ」

ジを重ね合わせて、冬の森に立つ1本の巨樹を表現することに決定した。

制作工程の特徴は、編地に縄編みを用いた点と和紙に刺繍を施している点である。縄編みを作品全体に巻きつけていくようなデザインから、巨樹に蔓が絡んでいくさまを表現し、和紙にコード刺繍を施したパーツは巨樹の風雪に曝された樹皮部分を現している。

この作品は、今年（2012年）8月、台湾の高雄市にて行われた国際服飾学術会議の「Art-to-Wear展」にて発表することが出来た（写真33）。作品は360度、どこから見ても柄が繋がっている点と、和紙と編地部分が違和感なく接合されている点など、技術的にも高い評価を受けた。そしてこの展覧会で、同時開催した台湾、韓国の学会関係者、また地元の高雄の人々へ山口県の伝統文化である徳地和紙をアピールできたことが一番の収穫であった。

その後「帰森Ⅳ」の制作に入った。この作品は、フィンランドで森に棲むといわれている精霊をイメージし2着1組にて表現した。今回は幻想的な場面を提示する為に、ワイヤーを用いて和紙とニットとの融合を図った。この作品は2012年9月、徳地の夏祭りにて行われたファッションショーにて発表することが決まっていた。その為に、植物のツルや木々の芽などをイメージしたパーツを加えることにより、観客それぞれの心の中にある森を感じてもらうことを主要なテーマとして作品に仕上げた（写真34）。

モデルはファッションショーが行われる徳地地区の児童（小学2年生と3年生）2名の協力を得ることができた。これは、徳地在住で筆者の友人であるFの協



33 国際服飾学術会議(高雄市)2012年8月22日



34 CSK13ファッションショー徳地COLORS
2012年9月1日 徳地総合支所特設ステージ

力を得て実現した。さらにモデルの保護者Uの計らいで島地小学校の学童保育にて試着とウォーキング練習を行うことができ、その結果多くの子供たちにこの和紙のワンピースを紹介することになった。この作品を近くで見たり、実際に触ったりして喜ぶ子供たちの笑



35 島地小学校にて試着 2012年8月29日



36 XmasファッションショーVol.9 「帰森Ⅲ・Ⅳ」2012年12月9日

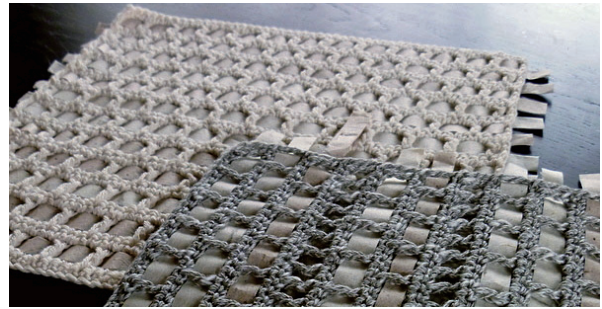
顔が実に印象的であった（写真35）。このことは地元の子供たちへ徳地和紙の強度や質感を直にアピールでき、和紙の普及とイメージアップの為に大変効果的であったと思われる。子供たちの心の中に、和紙の衣装が美しく記憶されることを期待する。

以上の「帰森Ⅲ・Ⅳ」は今年（2012年）12月9日に山口県立大学講堂桜園会館で開催されたクリスマスファッションショー 2012にて発表し、服飾造形としての新たな徳地和紙の可能性を広く紹介した（写真36）。

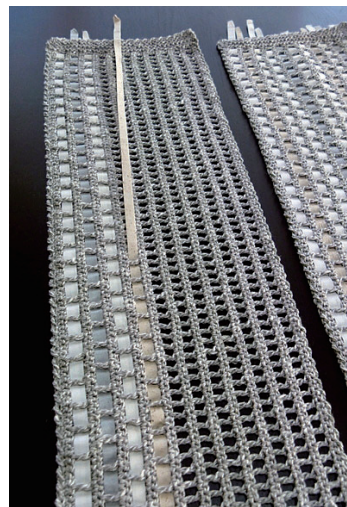
これらの「帰森シリーズⅠ～Ⅳ」は「帰森」という言葉を象徴するアート作品として、また徳地和紙を全国各地に紹介する為のモデル作品として、今後の個展活動に役立てたいと考えている。

（2）「帰森（きしん）」－ 徳地和紙を用いたニットによるライフデザインの提案 －

前節では、「帰森」を象徴した服飾造形として「帰森Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を紹介したが、ここでは、「帰森」をひとつのブランドとしてとらえ、暮らしの中で「使う」ということを目的とした作品を紹介する。今回も徳地手漉き和紙を用い、環境にも人体にもやさしい素材と



37 メッシュ&クロスの編地



38 メッシュ&クロス制作過程

ニットと融合させたデザインを提案している。

使用する主な編地は、初心者でも比較的簡単にかぎ針で編める方眼編みである。この方眼編みは、鎖編み、細編み、長編みで構成され、編みあがりもきれいなメッシュに仕上がることが特徴である。そしてそのメッシュ部分に三つ折りにした和紙を挟みこんで形成している（写真37）。以後、この編地と和紙を融合させた生地をその形状から「メッシュ&クロス」と記述する。

2012年はこの「メッシュ&クロス」を用いて、和紙製品の商品化を目的とした衣服やインテリアグッズを試作している。これらの制作上の特徴は、全て四角で構成している点である。その理由は、商品化したときに編地の制作が容易である点と、和紙が挟み込み易い点が挙げられる（写真38）。

まず、筆者はこの「メッシュ&クロス」を用いた衣服「帰森Ⅴ・Ⅵ」を制作した。この2点の作品コンセプトはシンプル&クールで、いかに簡単に創りあげるか、という課題に基づきデザインしている。このシンプルな構成は、2011年と2012年に訪れたフィンランドのデザインに深く影響を受けたと言える。

「帰森Ⅴ」は2枚のオーバースカートとノースリーブのトップから構成している。四角い編地で構成され



39 「帰森Ⅴ」トップ



40 「帰森Ⅵ」トップ



41 「帰森Ⅵ」パンツ



42 XmasファッションショーVol.9
「帰森Ⅴ・Ⅵ」2012年12月9日
志賀敏彦



43 インテリア作品 ランプ

た2枚のスカート部分は丈の長さを変え、また編み方向も縦と横に変えて表情をつけている。人体の右方向からと左方向から生地を巻き付けることにより、フリーサイズのスカートが完成した。そしてこのスカート部分が美しく映えるように、トップは極めてシンプルに仕上げた。それへスヌーズという筒状の編地を加えて、首回りにはゆるやかな表情をもたせた(写真39)。「帰森Ⅵ」はツートンカラーのハイネックのトップとパンツで構成している。この作品の特徴は、パンツの両脇部分にやや濃い色彩の編地を縦長に用いることで、足を長く見せる効果を狙っている(写真40・41)。

この2つの作品は、クリスマスファッションショー2012にて発表した。四角い編地のみで凹凸のある人体を覆うことによって発生する自然のドレープが、ひとつの意匠として美しく活かされ、クールでシンプルなイメージの和紙作品としてアピールできた(写真42)。ただし衣服として商品化を図るには、和紙部分の強度やメンテナンス(洗濯)の点で課題が残る。今後は和紙部分に丈夫な紙布(シフ)等を用いることが考えられる。

また、この「メッシュ&クロス」を、インテリアの素材として応用した作品を制作した(写真43)。ひとつはタペストリー、もうひとつはランプシェードである。これらは和紙部分を抜き取って本体の編地のみを洗うことができ、清潔な環境を望む人々にとって支持されるのではなかろうかと思われた。また挟み込む和紙の色彩を自由に換えることができ、季節やシチュエーションによって違った雰囲気を楽しむことができる。つまり使用者参加型の作品である。今後はこの特長を活かしインテリアとして商品化していくを考えている。

以上のように、筆者はニットと徳地和紙を組み合わせ「帰森」をテーマに造形的な作品を商品開発を視野に入れ制作してきた。今後は徳地和紙の用途を広げ衣類やインテリアグッズなどを制作するブランド「帰森」を立ち上げる予定である。この商品開発によって徳地和紙の需要が増え後継者の育成につながることを期待している。

(文責：浅田陽子)

8. フィンランドサンタクロース村での作品展

(1)アートマネジメントによる中山間地域活性化に向けた取り組みの経緯

初年度の「アウリンコ・徳地・タロ」プロジェクトにおいて、筆者は2011年12月4日から11日まで開催された「徳地の若手・手工芸作家展と徳地和紙や古布によるワークショップ作品展」のアート・コーディネータを務めた。展覧会のため徳地で作家活動をしている4人の若手・手工芸作家を選出し、作家の作品と、地域資源を活用した住民参加型のワークショップで完成した作品を、地域の芸術文化の発信拠点として整備されたアウリンコで同時に展示をした。

また、このプロジェクトには、山口県立大学がフィンランド国立ラップランド大学と国際学術交流や国際共同研究を行っていることを背景に、徳地の文化芸術の活性化のために、市民レベルの国際交流を取り入れ

た。徳地と北欧フィンランドとの文化的共通点を探りながら、文化の融合により、他にはないユニークなまちづくりを展開することが目的であった。ラップランド大学交換留学生タニヤ・セベリカンガスが徳地の地域住民との交流を通して、アウリンコのロゴデザイン、フィンランドの伝統装飾ヒンメリのワークショップ、そして町の一角で行われたアート・ペイントを担当した。

初年度の取り組みは、地域の抱える高齢化や過疎化といった社会的な課題を、アート活動により行政とは異なった糸口で解決しようとするものだった。そのため、人々が自分たちの暮らす地域で継承されてきた、地域資源の価値を再認識する機会をつくった。後継者問題に直面している徳地和紙に、服飾デザインや空間デザインを応用し、光をあてた。そして、アーティスト同士のネットワークが、新しい共同体を形成し、徳地をアーティスト村として確立させるきっかけを展覧会で模索した。

(2) 地域の作家のアートマネジメント

筆者は、1999年から約7年間、アメリカ合衆国フロリダ州に住んでいた。当時、米国の市場では、数多くの日本の和を意識した商品が注目を集めていたが、アートを取り巻く芸術環境では、日本人作家の作品を享受する機会はまだであった。その後、地元山口県に戻ってきて以来、まだあまり世に知られていない地域で活動する作家を、世界にプロデュースしていく方法はないかと考えるようになった。

展覧会終了後、選出した作家にインタビューをした結果分かったことは、徳地地域で活動する作家の多数は、自分の住んでいる場所やその周辺の都市の地域のニーズに焦点を当て、創作活動を行っているということだった。その理由は、作品を近郊で販売しているためである。作家のもの作りの意識の中には、世界の社会が何を求めているか、ということあまり視野がない。中山間地域を拠点に生活を営んでいる状況では、なかなか把握が難しいということが現実であろう。

現在の日本では、市場に向けた作家は飽和状態なのに対し、社会的循環を巻き起こす様な作家は少ない。売れる作品を作らなければならないといった、リミテーションのある価値観から脱却し、中山間地域の社会に生き、そこに存在する課題を理解し、解決策にアートを用いて見だしていく作家が現れば、先導者となり、地域を牽引していくリーダーになるのではないか。ひいては、賛同者を集め、中山間地域の活性化に貢献出来る共同体が生まれるであろう。

このようなことを念頭に置き、筆者は、初年度の展覧会で選出した作家の中から、木工作家の重田秀徳とオーダー家具の小松直樹にアプローチをした。二人の作家に、存続の危機に直面し、彼らの一番身近な所に存在をしている、地域資源である徳地和紙をデザインに取り組むよう依頼した。そして、その魅力と可能性を作家活動の新しい切り口として、アピールする手段に用いることを提案した。

(3) サンタクロース村での作品展の構想

以下では、徳地の作家を国際的にアートマネジメントした作品展の構想を紹介する。2010年から、山口県立大学とラップランド大学による学術交流提携が結ばれたことにより、ラップランド大学のあるロバニエミ市において作品展を行える選択肢が浮上した。

筆者が初めてロバニエミ市役所財政部長エルキ・カウットに会ったのは、山口県立大学大学院国際文化学研究科に入学する以前の2009年6月だった。ロバニエミ市から、カウットと地域開発機構のディレクターであるユハ・セツパラの2人が来山し、山口市を表敬訪問した。当時、筆者は山口市国際交流室で通訳を担当していたことから知り合うことになった。また「日本のクリスマスは山口から」実行委員会による会議が、山口商工会議所で行われ、筆者は通訳として参席した。この会議には、山口県立大学企画デザイン研究室の水谷由美子教授も参加していた。

ロバニエミ市は、フィンランドラップランド州政府公認のサンタクロース村を中心に、観光に力をいれている。山口は「日本のクリスマスは山口から」実行委員会が中心となって、日本で最初のクリスマスのミサが行われた史実を元にクリスマス発祥の地をコンセプトにしたイベントに力を入れている。両者は、こういった双方の取り組みに、共通点を見つけ、相互に高め合える関係が構築出来ないかと模索していた。会議中、サンタクロース村に、世界のクリスマスを紹介する施設があり、そこで、山口のクリスマスに対する取り組みを紹介する案が、ロバニエミ市から持ち上がった。しかし、山口市とロバニエミ市は、姉妹都市として締結してないため、市として実際に行動に移すには、動機が不十分であった。また、「日本のクリスマスは山口から」実行委員会は、大内氏の時代、山口でキリスト教の普及活動をした、フランシスコ・ザビエルの誕生の地、スペインバンプローナ市を一連の事業の根底に据えていた。このようなことから、この会議では、ロバニエミ市の提案は魅力的なものではあったが、現実化するには困難であるように思えた。



44 クリスマスハウスの[Christmas Exhibition]の
フィンランドの原始的クリスマスの展示 2012年11月8日



47 重田秀徳のアート作品の展示 2012年11月8日



45 2010年・2011年 企画デザイン研究室主催による
クリスマスファッションショー 2012年11月8日



48 重田秀徳のアート作品・「日本のクリスマスは山口から」
実行委員会のパネル・山口県立大学とラップランド大学による共
同研究作品の展示 2012年11月8日



46 2011年 山口県立大学とラップランド大学による共同研究作品
2012年11月8日



49 同上 2012年11月8日

その後筆者は、山口県立大学大学院国際文化学研究所に入学した。2011年8月にラップランド大学で開催された国際服飾学会海外研究会に出席するため、ロバニエミ市を訪問することになった。そこで、以前交流のあったエルキ・カウトに連絡をとった。現地ですべて実際にサンタクロース村を視察し、親睦会でカウトとロバニエミと山口の国際交流の可能性について談議していくうちに、企画デザイン研究室が主催となり、展示スペースを有効的に活用する案が持ち上がった。山口の独自のクリスマスに関する取り組みを、徳地の作家のアート作品と服飾デザインにより、世界に発信出

来ないかと考えた。

サンタクロース村には、多目的施設、例えば、サンタクロース・オフィス、サンタクロース・ポストオフィス、クリスマスハウス、そしてレストランやショップなどがある。サンタクロース村の担当者には訪問中に会うことが出来なかったため、展示を行うスペースの見学や構想を具体的にしていくことは簡単ではなかった。

そして、同年の11月、ラップランド大学との国際大学間学術交流のため、再度フィンランドを訪問する機会が訪れたため、カウトとサンタクロース村の展示

スペースについて協議を重ねた。しかし、筆者の諸事情から渡航を取りやめる結果となり、次年度にフィンランドを訪問する機会がまたあることを祈りながら、作品展の開催は延期となった。

(4) サンタクロース村での作品展の開催

サンタクロース村での展示の発案から、すでに3年の年月が過ぎていたが、再度山口県立大学とラップランド大学の学術交流ワークショップが、2012年11月に行われることになった。それ故、筆者は同年5月頃からロバニエミ市のカウットに連絡をとり、作品展の展示の具体的な内容を知らせた。ロバニエミ市に、サンタクロース村を管理する企業との対応を依頼し、クリスマスハウスという施設の「Christmas Exhibition」というコーナーでの展示の許可が下りた。山口県立大学企画デザイン研究室の主催する展示スペースの使用料金は、ロバニエミ市の計らいで免除された。しかし、展示スペースの詳細を日本で把握することは難しく、現地に到着し確認することが必要だったため、作品展の準備は難航した。

クリスマスハウスでは、世界の様々な場所における、クリスマスの風習や伝統的でノスタルジックな装飾の展示を「Christmas Exhibition」として紹介している。フィンランドラップランド地方をはじめ、イギリス、ロシア、ドイツ、アイスランド、フランス、オーストリア、スペイン、ポーランド、そして、アメリカ合衆国の展示が行われている。フィンランド大使館報道担当参事官ミッコ・コイヴマーによると、この「Christmas Exhibition」は、12月から1月にかけてのシーズン中、一日約1000人から2000人のヨーロッパ諸国からの観光客で賑わう（写真44）。

11月6日、ラップランド大学のマルヤッタ・ヘイッキラ＝ラスタス教授と、パイヴィ・ラウタヨキ講師の協力のもと、現地の展示スペースを確認した。まだ、シーズンではないことから、「Christmas Exhibition」は閉館していた。展示スペースに余裕があったことから、2010年と2011年に企画デザイン研究室が主催した、クリスマスファッションショーのパネルを展示することになった（写真45）。この2回のファッションショーでは、ラップランド大学との共同研究が発表されている。2010年には、ロバニエミ市の助成でサンタクロース村から、サンタクロースが山口市民館で行われたクリスマス・インスピレーションを訪れ、山口市の青少年との交流も実現している。さらには、ラップランド大学の学長や教授が来山し、ロバニエミ市と山口市の市民レベル、学術レベルでの交流が活発に行われた。2011

と2012年のファッションショーでは、フィンランドの伝統装飾であるヒンメリを、ショーの両脇にインスタレーションとして展示し、フィンランドとの継続した関係性をアピールしている。このショーで発表した衣装2点は、両者の地域資源であるフェルト、トナカイの皮、柳井縞、デニム等を活用し、両大学の学生が学術交流であるワークショップで制作したものである（写真46）。

11月8日には、最終的な展示作業が行われた。他の展示内容は、山口市の「日本のクリスマスは山口から」実行委員会が行っている、山口独自のクリスマスの取り組みの紹介パネル2枚、また、徳地の木工作家重田秀徳のサンタクロースのパズル2点とモビール1点、徳地和紙のクリスマスオーナメント1点である（写真47・48・49）。

特に、重田秀徳は、子どもを対象にしたクリスマスの作品を、以前から手がけていた。ヨーロッパの伝統的なクリスマスの展示の中で、優しさとウィットに包まれた彼の作風は異色であり、新鮮でもあった。

(5) 今後の展望

近年益々、日本人にとってクリスマスとサンタクロースは、身近なものになってきている。今回作品展を開催した、ロバニエミ市のサンタクロース村は、クリスマスシーズンにかかわらず、人気のある観光サイトとして親しまれてきていることから、NHKや民放放送が度々紹介をしている。そして、クリスマスの時期に、自治体、団体、企業がフィンランド政府公認のサンタクロースを招へいし、子ども達と交流するイベントが多く見かけられるようになった。

このように、日本人のクリスマスの習慣にサンタクロースは、定着してきているわけだが、この原点となっている世界のサンタクロース村に、日本の一地方都市である、山口のクリスマスに対する取り組みの展示が行えたことは、大変喜ばしいことである。今回の作品展は、企画デザイン研究室が発足以来地道に築いてきた、人と人との信頼関係がなければ達成できなかった。そして今後も、この関係を継続し発展させていくことで、新たな山口の可能性を世界に発信していきたい。（文責：松原直子）

まとめ

今年度は活動拠点の「アウリンコ・徳地・タロ」が、ファッション、テキスタイルそしてインテリアなどの展示販売やアトリエさらに地域の人々の地元のお茶を巡ったサロンの空間に成長したことは有意義なことで

あった。

さらに、夏祭りの日に合わせて人形浄瑠璃「とくち座」の公演が行われ、メディアを通じて話題になったことから、年に4回もの公演がすでに行われた。アートと舞台芸術など、その時々によって徳地に文化芸術の発信スペースに育ちつつあることは大きな成果である。

また、2011年に地元住人とともにワークショップで作った三桎の枝を使ったイルミネーションが、2012年に山口市内のイベントや徳地の夏祭りに新しい造形を加えて展示されたことは、本論でも指摘したように地域の自発的な活動へと発展した好例である。

ファッションショーは、はじめて徳地で行われた。地域の全戸にチラシを配布したことが浸透に役だったことは否めない。1時間以上も前から席取りをして待っていた住人の姿を見て、感動さえした。ファッションショーを見たことがない人は、ただ派手な服を着たモデルが歩き回るといような印象を持つ人が多く、企画の段階ではいろいろと理解されないことが多い。

しかし、今回のファッションショーでは、徳地の人々の着物や浴衣などをリユースして作った服装や徳地和紙の振興のために商品開発された和紙の衣服、帽子そしてコサージュなどが評判を呼んだ。また、学部ゼミ生がさんさ踊りの先導で歩く人のために依頼されたオリジナルの提灯も発表した。

来年度は、今年のファッションショーで提案した提灯や帽子、さらにクリスマスファッションショーで提案したショール、着物の帯、ワンピースなど徳地和紙を素材にしたプロトダクトのプロトタイプを、さらにブラッシュアップして商品開発にこぎつけたいと考える。

袴パンツプロジェクトと同様に、住民が制作し、ひいては産業の振興に繋がっていくような仕組み作りを徳地の人々と継続して実施していけることを期待している。

また、出雲さんさ祭りの創設に合わせて、個性的な衣装の提案もできた。地域の歴史、文化、産業などを意識した服飾デザインであったために、人々には身近に感じられたに違いない。

会場の観客の声から、「あれは着られるね。あれはどうなっているものか？」などいろいろなコメントをしながら楽しんだようだ。こうした新しい文化が過疎化した中山間の人々の生活の意識の中に浸透して行くことを願う。

最後に、2007年以来のラップランド大学との交流、

そして2009年からの地域資源を用いた服飾デザインのワークショップは今年度で4回目を迎えた。双方が行き来して、交流を継続することで、短期間の滞在ではあるが、徐々に理解が深まりワークショップの質も上がってきている。

同時に、2010年からロバニエミ市との縁が生まれ、その年のクリスマス・インスピレーションにロバニエミ市はサンタクロース村のサンタクロースと教員3名そして学生1名、合計5名を山口に派遣した。

2011年にはこうしたラップランド大学やロバニエミ市との縁から、筆者が理事をしている国際服飾学会の海外研究会がラップランド大学で実現した。ロバニエミ市はワットンキンカンガスという市の管理する森にある伝統的なサウナなどを、参加者に解放するなど、さまざまな交流を支援した。

こうした交流の継続もあり、松原直子のサンタクロース村での展覧会が実現した。交流と継続そして信頼が、クリエイションを生み出す大切なキーワードである。

森という共通の環境を結び付けて、ロバニエミと徳地の交流を行っている。山口県立大学には毎年、数人の交換留学生が来て、我々の交流に貢献している。海外との交流によって、徳地に新しいイメージ、国際的な環境などが生まれることで話題性や新規性などが生まれ、地域の活性化がますます発展されるに違いない。当研究室の活動は、微力ではあるが継続的に徳地手漉き和紙を用いた創作研究をしていく予定である。(文責：水谷由美子)

謝辞

最後にこの研究を遂行するに当たり、協力を得たラップランド大学マルヤッター・ハイッキラ＝ラスタス教授、パイヴィ・ラウタヨキ講師、ロバニエミ市財務部長エルッキ・カウット氏にサンタクロース村サンタクロースハウスのスタッフの皆様に心からお礼を申し上げたい。

また、夏祭りでのファッションショー「徳地COLORS」の開催に当たり、協力を頂いた出雲ふるさとさんさ祭り実行委員会実行委員長の益田克彦、とくち花火大会実行委員会実行委員長の藤本猛、徳地観光協会会長前田繁志、会場を提供した山口市徳地総合支所さらに地域との共同研究に助成をした山口県、山口市そしてヘアメイクを担当した東亜大学芸術学部トータルビューティ学科の皆川禎啓講師をはじめ学生たち、実施に対し支援した山口県立大学学長江里健輔

他、各機関の皆様にも、この場を借りて心からお礼申し上げます。

注

- 1 昨年の活動については以下の稿を参考にされたい。
水谷由美子・松永美代子・木村和枝・浅田陽子・松原直子・武永佳奈・藤田幸司 「中山間地域活性化に向けた服飾デザインとアートマネジメント - 『アウリンコ・徳地・タロ』プロジェクトを事例として-」『山口県立大学学術情報』5号 山口県立大学、2011年、9 - 39頁。
- 2 和紙の造形文化や歴史についてはサントリー美術館「美しの和紙 - 天平の昔から未来へ -」展(2009年9月19日(土)～11月3日(火・祝))およびそのカタログ『美しの和紙 - 天平の昔から未来へ -』サントリー美術館 2009年を参照した。
- 3 白石和紙工房は、1982年のイッセイミヤケの紙衣のコレクションに素材を提供している。筆者は2011年9月に訪問し、工房の主宰者である遠藤ましこにインタビューを行った。そこで修二会で使用された紙衣を拝見した。三宅一生は2011年に修二会用の布を東大寺に届ける時のために、遠藤ましこに紙衣をデザインしプレゼントをした。この制作プロセスがNHK総合「三生一生 東北へ伝統を未来につなぐ旅」(2012年1月3日)で放映された。
- 4 大谷篤蔵・中村俊定共校注 『芭蕉句集』日本古典文学大系45 岩波書店、1969年、27頁。
- 5 先掲書、56頁。
- 6 寿岳文章監修 国東治兵衛『紙漉重宝記(かみすきちょうほうき)』(浪華書林1798)復刻版、光彩社、1975年、2頁。
- 7 紙布や紙衣の歴史や作り方について吉岡幸雄 「紙衣・紙布」『染織の美』23 京都書院、1983年、81-90頁を参照した。
- 8 徳地町教育委員会編『徳地の昔ばなし』徳地町教育委員会、1985年、96頁。
- 9 長崎盛輝『色・彩飾の日本史』淡交社、1991年、220-235頁。
- 10 中田満雄・北畑耀・細野尚志共著、日本色彩研究所『デザインの色』日本色研究事業、2003年。
- 11 「森の力でスッキリ」読売新聞 2012年10月21日(日曜日) 12版より
- 12 ネイチャー・プロ編『森の本』角川書店、2009年。

参考資料

- 川崎賢一・佐々木雅幸・河島信子共著『アーツ・マネジメント』放送大学教育振興会、2002年。
- 中川 真+編集部『これからのアートマネジメント “ソーシャル・シェア”への道』フィルムアート社、2012年。
- 「SANTA CLAUS VILLAGE」
<http://www.santaclausvillage.info/santa-claus/christmas-exhibition/> 2012年12月12日取得。
- 「ロバニエミ市」<http://www.visitrovaniemi.fi/In-English/Christmas> 2012年12月12日取得。

●さんさ踊りに関する参考資料

さんさ踊りは全国に分布しており、その歴史や発展の経路などは明らかにはなっていない。本論では現在、さんさ踊りに関して全国的にもっとも有名な岩手県盛岡市で行われている都市型の祭り、盛岡さんさ踊りに関してフィールドワークをした結果について記述する。

筆者は2012年8月3日、4日と盛岡に滞在し、現地調査をするのと同時に5日(午後1時半)に盛岡商工会議所を訪問し、インタビューを行った。そこではどのようにして盛岡さんさ踊りが現在のように東北を代表する祭りとして発展したかについて簡単に記述する。

今回のインタビューには盛岡商工会議所地域活性化支援チーム佐藤誠司と岩手県立大学短期大学部佐藤恭子に協力を得た。

盛岡さんさ踊りは1978年(昭和53年)に創設された。創設に向けて、盛岡市、盛岡商工会議所そして盛岡青年会議所が中心になって盛岡さんさ踊り振興協議会が発足した。会長は盛岡市長、実行委員長は商工会議所会頭であった。事務局は現在まで盛岡商工会議所におかれている。

さんさ踊りの日程は東北3大祭りのトップをきることを目的として8月2日、3日の2日間で始まった。現在は2012年の例にあるように8月1日(水)～8月4日(日)の4日間実施されている。内容はもともと盛岡各地で踊られていた伝統的なさんさ踊りを一同に会して踊る、新しい都市の祭りの形式にしたものである。踊りの内容はもともと輪踊りであったものを行列して練り踊る形式にし、踊り自体は地域それぞれの特徴のいい部分を総合して新しいさんさ踊りを作った。この期間、盛岡市の官庁街がある目抜き通りは夕方、大規模なパフォーマンス空間に変貌する。

新しく編集して作られたさんさ踊りは、ミスさんさによって習得され、当初から現在までミスさんさ踊りとして披露される仕組みとなっている。ミスさんさは毎年3名選ばれる。彼女たちは5月にコンテストで選ばれその後8月の本番まで土日以外は練習に励む。そして70回以上観光アピール大使として、いろいろな場所に呼ばれて活躍する。

特に盛岡のさんさ踊りの特徴は、ミス太鼓連に代表されるように各団体に太鼓連が伴っていて、その数も2500名以上が参加しておりかつてはギネスに登録された。太鼓の音が会場に響き渡り、掛け声と踊りがダイナミックに融合し、圧倒されるような空間を生み出している。佐藤は追々ギネスに再度挑戦すると言っている。

踊りの人数を合わせて毎日6000人の人々がさんさ踊りに参加するという、極めて規模の大きな祭りに成長している。それゆえに、この祭りに続く仙台の七夕祭り、秋田竿燈まつりそして青森ねぶた祭りとともに、東北を代表する祭りとして知られるようになってきている。

話を戻すと、それぞれの踊りのグループをおへれんせ集団と呼ぶ。企業、大学、学校、地域のコミュニティや自発的なグループなどで結成され、2012年は245団体が参加している。

ミスさんさ踊りやミス太鼓連には学生や社員の女性を選ばれ、活躍する。今年の事例では、初回から現在までの各ミスによってミスさんさ踊りのおへれんせ集団が参加していた。彼女たちは徹底的に練習をしており、美しい踊りの象徴的存在を務めている。

各おへれんせ集団は基本的にはおそろいの浴衣を着て、花笠を被っている。毎年、審査があり、踊りや演出さらに衣装などが審査され、総合的な優勝グループとパフォーマンス賞などが選ばれる。毎日その日の優勝者が決まり次の年には優先的に参加の機会が与えられる。

今回の協力者、佐藤恭子が属している岩手県立大学は毎年優勝しており、学生たちが活躍している。2012年のさんさ踊りに関して、佐藤は赴任したばかりの年であったために傍観者であるが、来年は学生と一緒に

参加すると意気込んでいた。

いずれにしても、基本は伝統的な踊りであるが、ミスさんさ踊りが仕組みとして作られていることから、美しさと若々しさのシンボリックな存在がいることが効果的である。さらに、企業や学生の多くの若者が参加しており、活気がある。また、それぞれがコンテスト形式で賞がつけられるためによく練習されている。地域の宗教的な意味合いを含んだ踊りから、観光的な意味も含めて見せる踊りに昇華されている。

地域住民あるいは諸団体の努力と情熱が、盛岡のさんさ踊りを新しい東北を代表する祭りまでに持ち上げたことは大きな功績である。他方で、伝統的な地域のさんさ踊りの継承をしている団体がおり、最後の日の終了前に時間が設定されていて輪踊りになって踊られる。やはり、継承の問題があって、17団体以外の今後の存続はむつかしくなっている。現在は小学校の運動会でさんさ踊りが踊られ継承のための教育的配慮がされている。

盛岡さんさ踊りは、以上のように伝統的な祭りを土台にしながらも、ミスさんさ踊りを作ることで、若々しさと美しさそして何よりも自分たちが楽しむだけでなく、観光的にも見せられる踊りまで内容が高められている点に注目する必要がある(写真50・51・52・53・54)。

地域の伝統的な踊りを継承するために、昼間、路上とは異なる会場でそれぞれの地域の踊りを披露する機会が設けられている点が素晴らしい。

現在の盛岡さんさ祭りの詳細については以下のURLを参考にされたい。(文責 水谷由美子)

*参考URL

「盛岡さんさ踊り公式ホームページ」<http://www.sansaodori.jp/>

謝辞

最後に、この場をお借りして今回の現地調査の協力をして頂いた盛岡商工会議所地域活性化支援チーム佐藤誠司と岩手県立大学短期大学部講師佐藤恭子に深くお礼申し上げる。



50 盛岡さんさ祭りに参加した山車



51 盛岡さんさ踊りに参加する学生



52 花笠を付けた伝統スタイルの踊手



53 山車の上で踊る第34代ミスさんさ



54 ミス太鼓と筆者

■ 写真資料撮影者リスト

河合 章夫	2-1・2-2・4・5・10・14・29・30・ 31・32・34
志賀 敏彦	42
松原 和麻	16・17・36
水谷由美子	1・44・45・46・47・48・50・51・ 52・53・54
浅田 陽子	26・27・28・33・35・37・38・39・ 40・41・43
水津 初美	11・12・13・15・18・23・24・25
水津 正吾	19・20・21・22
武永 佳奈	6・7・8・9
松原 直子	3
Riikka Oikarainen	49

